



重層屋根瓦方式で世界へ 飛躍する医師を育てる

山梨県立病院機構理事長
東京大学名誉教授

小俣 政男

■ Touch First

どのように患者さんが来るかわからない状況に投げ込まれ、医師として動じず冷静に診療するというトレーニングをまず行う必要がある。ある年の8月の救急には、子どもの発熱、盲腸炎、過換気症候群、自殺企図、急性腹症、気管支炎、高血圧症、インフルエンザ、胃潰瘍、心筋梗塞、虫刺され、腸閉塞、めまい、前立腺肥大など多岐に渡る患者さんが来る、まさに暑い夏です。この多様性を1年間経験し自ら対応できるように努める、と同時に、来るべき1年生の“Senior”としての役割を果たす。それこそ屋根瓦方式です。

■ Protected

しかし、ただそのExposureに諸君を投げ出すわけではありません。そこで機能するのが、“重層屋根瓦方式”です。臨床に身をおいて10～30年のベテラン、さらには救命救急センターの心肺停止から蘇生を行うチームまで、幾層にも多くの専門医が後ろに控えています。初動の対応を、研修医が安全に行えるシステムがすでに当院にはあります。現在は、初期研修(1年、2年)36名が研修に励んでいます。

■ 後期研修に向け

自身、27歳(44年前)で米国Matching Programに応募、渡米し6年間の米国体験を有する。その実体験から、これからの、卒後研修の真価が問われるのは実は「後期研修」ではないかと考えます。

若き医師の多様な願望に答える為、「後期研修」期間には特に、研修の幅に“Spectrum”を持たせる必要があります。“First Touch”から、専門医の取得、更に当院で蓄積された臨床データのPublication或いは海外留学など、専門性のある後期トレーニングの質改善に努め、毎年30名程度(卒後3-5年)が研修に励んでいます。当院では臨床研究を推進し、1年間の学会発表は400回以上、当院発の英文論文も30数編に及びます。(H30年5月 年報44巻より)

■ 人生は一度、しかも最初の五年

医師になってからの最初の数年間がその後の成長にいかに大切な時期であるかを、48年間臨床に携わった今でも実感しています。

意欲あふれる皆さんが当院の研修に参加されたあかつきには、全職員一致団結して将来の日本の医療を担う人材の育成に努めることをお約束いたします。



山梨県立中央病院

病院長 **神宮寺 禎巳**

これから医師の道を歩み出そうとしている皆さん、当院で臨床研修を始めてみませんか？

当院での研修の特徴は、何といても症例が豊富なことにあります。急性・慢性、一般・稀少を問わず、あらゆる分野の疾患を偏りなく経験することができます。特に救急医療の研修は充実しており、救命救急センターでの三次救急と地域輪番制の二次救急が皆さんの「臨床力」を確実に高めます。

私達は、日々の診療の中で皆さんと一緒に行動することにより、臨床研修を実りあるものにするように努力していますが、さらに、研修の状況を正確に把握することにより、研修システムをより良いものに変えてゆきたいと考えています。

病院が研修医を磨くとともに、病院は研修医によって磨かれます。積極的に研修に取り組む意欲あふれる皆さんの応募を心よりお待ちしております。



山梨県立北病院

病院長 **宮田 量治**

後期臨床研修の3年間でさまざまな精神疾患に対応できる力をつけることは容易ではありません。北病院では、乳幼児を除くほぼ全ての年代/精神疾患に対応し、初診の3割は20歳未満の思春期例です。救急急性期症例、指定医症

例・専門医症例を無理なく経験でき、司法精神医学、アルコール依存症治療なども身近なものとして体験できます。精神科医として第一歩を踏み出そうとしている皆さんにはうってつけの病院と自負しています。

よい医師は、患者さんが育てるものです。たくさん経験を通し、試行錯誤する過程を体験し、医師は力をつけていきます。そのためには、最先端の情報を集めたりまとめたりすることも必要となります。研修は大変なこともあるかもしれませんが、研修医の皆さんの一生の宝となるようにスタッフ一同頑張りますのでよろしくお願いたします。ぜひ一緒に新しい精神科臨床を切り開きましょう。



平成30年度採用初期研修医